人間革命

人間革命

第七巻

池田大作

聖教新聞社

人間革命

第七巻

昭和47年2月16日　発行
昭和48年8月8日　第15刷　　定価500円

著者© 池田大作
発行者 美坂房洋

発行所 番便郵号 160
東京都新宿区信濃町18
電話 03 (353) 6111
聖教新聞社

落丁・乱丁本はお取替えいたします
印刷 明和印刷株式会社
製本 株式会社 星共社

1973 Printed in Japan

目

次

飛翔　3
原点　78
翼の下　132
水滸の誓　193
匆匆の間　240

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人間革命

第七巻

装画　三川芳悌

挿画　端龍吉子

飛翔

実践は、宗教の生命である。

その生命なき宗教は、もはや朽ち果てていく以外にない。

真の宗教は、歴史を転換しゆく、新しい原動力となっていくことであろう。

昭和二十八年は、立宗宣言の年から、七百一年目にあたっていた。

日蓮大聖人は、立宗宣言の年から二十七年目に、出世の本懐ともいうべき、本門の大御本尊を顕わされている。その間の、言語に絶する法難の数々の記録は周知の通りである。

立宗七百年祭を終えたあとの創価学会の急速な発展も、まさしく、その本格的な実践遂行の賜といってよい。事実、昭和二十八年の足跡を、今日ふりかえってみる時、この年ほど飛躍的に進展した年もない。それは、世帯数の急激な、増加率に見ることができる。年頭には、わずか

二万であったのが、この年、新たに五万世帯の入信を数え、実に七万世帯となったのである。

それだけに、戸田城聖の年頭における決意も、並々ならぬ厳しいものであったに相違ない。彼の胸中には幾多の画期的な計画が秘められていた。

正月二日――初登山の夜、総本山理境坊の二階で、大幹部会が開かれた。この一年間の行事大綱のための会議である。八畳と十畳つづきの部屋には、緊迫した熱気がたちこめていた。

戸田を取り囲んで、自然に半円がつくられている。最高首脳陣は、行事大綱を説明する企画部長の小西武雄に視線を集中していた。

――四月十九日、男子青年部第一回総会。四月二十八日、五重塔修復記念法要。五月三日、第八回総会。六月二十八日、第二期教学部員任用試験。七月三十一日より八月四日まで夏季講習会。引き続いて八月五日より十日間、地方折伏――。

ここまで企画部長の話が進んだ時、戸田は小西の発言をおさえていった。

「今年の夏季折伏は、昨年よりも更に大勢の幹部を繰り出すことになるだろう。大阪、名古屋、九州のほかに、今年は北海道にも送りたい。広汎な全国作戦だ。費用も莫大なものになるだろうが、そんなことに拘泥していられない時期になっているのです。学会の態勢もととのってきた。戦後の新興教団が伸びたのは、都会よりも地方に伸びたからと思う。いよいよ、彼ら新興宗団を

追い越す基盤をつくるのに、今年ほど大切な時期はない。今年の最大行事の一つであることを銘記してほしい。

自然発生的ではあったが、昨年伸びた支部は、いずれも地方に伸びている。蒲田も鶴見も杉並も足立も、みなそうではないか。今から眼を大きくあけて、各支部の地方拠点に、じっと眼を注いでもらいたい。地方統監部長、よく点検して、今から計画をしっかり頼む」

戸田は原山地方統監部長をふりかえって、念を押すことを忘れなかった。緻密な頭脳の発露より、人は生かされ、組織は潤滑に流れていく。統監部は組織体の元締めであり、いうなれば組織科学研究機関である。

「はい、よくわかっております」

視線は一斉に原山統監部長に移った。原山は大きく頷き、並みいる各支部長に向かっていった。

「統監部の仕事は今後ますます複雑多岐になってくると思います。なんといっても、皆さんのご協力がないことには、本部としてなんの作戦計画も立たないのです。そこで、この地方折伏の計画のために、まず各支部の地方拠点の正確な世帯数を、全国の県市町村別に提出願いたいと思います」

理境坊の玄関では、新年の挨拶に訪ねてきた人であろう、話の気配がある。

原山は、落ち着いた様子で話を進めた。

「組織は隅々まで活かさなければなりません。これまでも各支部の統監事項は、かなり杜撰な面があって弱りました。大変だ、やっかいだと思うような地道な活動の積み重ねの上にこそ、偉大な城は構築されていくのです。広宣流布の邪魔をしているような統監部であってはなりません。今年からは、万事、正確に明確に、お願いいたします」

全国的発展の構想は、戸田の胸中に、年来秘められてきたのであった。これまでにも仙台、大阪と強力な手を打ってはきたが、全国的という規模からすれば、いまだ微弱という以外になかった。彼の構想のなかには、全国津々浦々の都市に、支部旗が翩翻とひるがえる時の情景が、まざまざと描かれていたにちがいない。しかし、それは、昭和二十八年当時には、ただ一人、戸田の脳裏にしかないことであった。

小西企画部長は、再び主要行事の説明を続けた。

——七月二十六日、女子青年部第一回総会。十一月二十二日、第九回総会。十二月二十三日、男子青年部第二回総会。

説明が終わると、彼は最後にこういった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「以上は、飽くまでも大綱であって、これに合わせて、更に支部の一年の行事を企画していただきたいのです。今年は忙しい年になりそうです。それだけに企画性に富んだ予定を立ててください。そして、座談会や教学にいたるまで、あらゆる行事を完璧にこなしていかねばならぬと思います。安易な企画で、要領よくその日を送ることは、もはや許されぬ時代に入りました。効果のない行事は、一つでもあってはならない。効果のある実践の時代です。

なお、数年来の懸案であった、学会本部の建て物の購入も、本年こそ是非とも、実現いたしたいと考えている次第です」

一段と進みゆく展望に、幹部は拍車をかけられた。広宣流布は、もはや単なる観念ではない。激しい、実践段階に入ったことを悟らねばならなかった。年頭における、緊張と決意が、誰の胸にも湧き、逡巡の雲を払った。時計は八時を過ぎている。

戸田は、微笑を浮かべながら一同の顔を見渡していた。会議は、これで終わったかに思われた。ささやかな酒宴が続くものと、誰しもが思ったのである。ところが、戸田は急に厳しい表情になって、清原かつに向かっていった。

「本部辞令を発表しなさい」

一同は固唾をのんだ。なにごとだろうと、身構えるなかに、清原はすっくと立ち上がった。

「石川　幸男　　小岩支部長に任ず
石川　英子　　小岩支部婦人部長に任ず
入江千佐子　　青年部女子部長に任ず
山本　伸一　　青年部男子第一部隊長（現在は部と改称）に任ず
石村　久子　　青年部女子第二部隊長に任ず
……」

簡潔な伝達であった。しかしそのなかに、新しい前進の一切が秘められていた。

清原の高い声は消えた。居並ぶ者にも咳一つなかった。

小岩支部を中心とした異動である。これまでの支部長・富山一作は幹事になり、青年部第一部隊長であった石川幸男と交代した。新しい女子部長には入江千佐子が、男子第一部隊長には山本伸一が、それぞれ抜擢されて任命をみたのである。

実に唐突な任命であった。

前日の元旦、神田の本部で清々しい勤行をした時、戸田は異動について一言もいわなかった。彼はただ、考え深そうに、こう発言しただけである。

「昨年中は、まことにご苦労さまでした。今年もまたよろしく奮闘を願います。

諸君は、学会の大黒柱として、実に重要な任にあたっている人びとであります。戸田は、御本尊様に命を捧げ、この体をすでに投げ出しております。

今年は、地方も大々的に開拓していかなければならないし、やりはじめた仕事もたくさんあります。思えば大変であるが、どうか、御本尊様のために、しっかり働いていただきたい」

それから直ちに、東京駅を発って本山に向かっている。多くの幹部と一緒の車中でも、異動のことはなにもいわなかった。いつものように、泉田ために御書を読ませながら、じっとそれを聴きいっている戸田だった。本山に着いてからも、いつ、清原かつに本部辞令を書き取らせたのか、誰ひとり気づかなかった。

小岩支部の大黒柱の異動である。自分の名前を呼ばれた人びとは、わが耳を疑うような様子で呆然としていた。

戸田は、富山に鋭く声をかけた。

「長い間、小岩支部長としての任、ご苦労でした。学会は急速に前進せざるをえない時期に入ったのだ。富山君、これで安心などしないで、心機一転してもらいたい。先輩として、大支部幹事となって、新支部長の石川を補佐してもらいたい。これができないようでは、君の信心は、もはや将来性がないことになるだろう。勇気ある信心で、人生を開き給え」

厳しい指摘であった。富山は昭和二十六年八月、泉田筆頭理事のあとを受けて支部長に就任している。当時、小岩支部はA級の大支部として華々しい活躍をしていた。ところが、一年半たった現在、支部順位で七位に転落。その行き詰まりは日を追って深刻化していたのである。富山は生真面目であるだけに、責任を感じて、あがいていたにちがいない。彼がひとり悩んでいる間に、事態はずるずると悪化した。戸田は憂慮しながら、叱咤と激励を忘れなかった。しかし、懊悩に埋没してしまった富山は、それに応える術を失っていたのであろう、再起の発心をするよりも、支部長辞任をもらしはじめたのである。

戸田の憂慮は深くなった。富山も愛すべき男であったが、戸田にとっては、小岩支部の二千数百世帯の支部員全員が、更に可愛かった。その支部員たちが、もはや富山についていかなくなってしまった。魅力がない、生気がない、包容力がない、と支部員の声は厳しかった。

組織は、その人によって有終の美を飾ることを、まざまざと戸田は悟った。中心者に力がなく、信頼と尊敬とを失った時、組織は沈滞し、壊滅する以外にない。戸田は逝去の日まで、人事ほど大切なことはないと、よく述懐していた。彼は、この小岩支部の問題について、昨秋から決断を迫られる思いでいたのである。

戸田は思索していた。いな、熟慮しているうちに、いつしか年も越えてしまった。人情の厚い

彼は、真面目な区役所の役人である富山を簡単に解任することには一種の抵抗を感じ、一日延ばしにしてきたのであろう。

しかし、昭和二十八年の正月を迎え、創価学会躍進の展望を胸に描いていった時、戸田は突如としてこの異動を断行せざるをえなかったのである。

若い石川幸男には、荷が重すぎるとも思えた。これは一つの賭けにも似ていると考えていたことであろう。しかし、青年部の幹部であった石川も、まもなく二十八歳を迎えるし、そろそろ苦労させてもよいまでに成長したところである。鉄は、熱いうちに鍛えなければならない。婦人部長に、妻の石川英子を任命することによって、若い二人が力を合わせて新風を吹き込めば、小岩支部も新しい面目をもつことになるだろう。

いずれにしても、男女青年部の薫陶を受けてきた二人が、支部の最高の責任者となって指揮をとる時、どのような働きをするか、一つの試金石とも思われた。

第一部隊長の後任に、山本伸一を任命したことは、伸一をそろそろ第一線に出す時がきていることを、痛感していたからである。伸一には特に訓練に訓練をかさね、機ももはや充分に熟しきっている以上、それは当然な決断であった。

一月二日は、山本伸一の二十五回目の誕生日であった。その夜、彼は任命を受けた時、凛然と

して、この年を戦い切る覚悟を新たにした。批判力と探究心に燃える青年を率いて、果たしてどこまで戦えるか、徹底的な闘争を、わが心に強く誓ったのである。彼には、なんの不安もなかった。困惑もなかった。未来への若々しい挑戦があった。待機の姿勢は完璧であったのである。彼はすでに飛翔しつつあった。

戸田は、異動の発表の直後、小岩支部の新旧支部長交代式と、第一部隊の新部隊長の就任式とを、早急に開催することを命じた。

「今夜こうした決定をみた以上、即座に態勢を整えたい。いつにするか？」

戸田の性急な話に、石川は答えた。

「東京に帰って、全支部員に通達しなければなりませんから、十日頃にいたしたいと思います」

「十日？　遅いな。一日一日が真剣勝負だ。できるだけ早い日に決めなさい。支部員への通達に一週間もかかるようでは、組織は死んでいる。五日はどうだ。五日にしたまえ。伸一の方は六日にしなさい」

またしても厳命である。

二日夜の発表は、まだ居合わせた大幹部だけしか知らないことであった。それが五日に交代式を挙行しなければならぬという。石川の戸惑うのも無理からぬことであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com